

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350728

研究課題名(和文) コミュニケーション能力育成のための体育モデル授業の構築

研究課題名(英文) Attempt to model physical education to develop communicative abilities

研究代表者

日高 正博 (HIDAKA, MASAHIRO)

宮崎大学・教育文化学部・教授

研究者番号：80452853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：体育授業及びスポーツ実践場面におけるコミュニケーション・チャンネルの実態を捉えることから、コミュニケーション能力を育成する体育授業のモデルを構築しようとした。その結果、体育授業は感情の生起に伴うチャンネルが多様に出現することから、情動を揺さぶるための適切な課題の提示の必要性などが示された。また、短い言葉で端的に伝える場面と豊かな言語的活動が求められる場面がある一方で、ジェスチャーで意思疎通を図る場面もある。いずれも、その種目について詳しい方がコミュニケーションを量的にも質的にも豊かに展開できる点を示され、中核的教育内容である技術や戦術を身につけさせることが重要であると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to attempt to model physical education to develop communicative abilities through clarifying the nature of communication channel among students during physical education classes and sport activities in schools. The results indicated that it would be necessary to set an appropriate task to evoke emotional responses because various patterns of emotional channels were observed. The students communicated through simple words, expressive phrases or non-verbal manners such as gesture due to situations. It was also shown that a student who was well familiar with the activity communicated both quantitatively and qualitatively more than others did. It was assumed that it would be important to educate skills and strategies linked to sports and activities to enhance communicative abilities.

研究分野：体育科教育学

キーワード：コミュニケーション能力 体育授業

1. 研究開始当初の背景

昨今、子どものみならず、若者のコミュニケーション能力が育っていないとの指摘をよく耳にする。

文部科学省も「子ども達が自分の感情や思いをつまく表現することができず、容易にキレるなどの課題が指摘されている」として、子ども達のコミュニケーション能力の育成を図るための方策や普及のあり方について調査・検討する「コミュニケーション教育推進会議」を平成 22 年 5 月に設置している。この推進会議の審議経過報告(平成 23 年 8 月)には、「子ども達は気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションを取る傾向が見られる。また、「コミュニケーションを取っているつもりが、実際は自分の思いを一方的に伝えているに過ぎない場合が多いなどの指摘がある。」や、「児童生徒が不登校となったきっかけとして、友人関係をめぐる問題が約 20%を占め、また、約 8 割の大学等において、家族、友人などの対人関係に関する学生相談が増加しているとの調査がある。」としている。

そもそも、コミュニケーションとは、「情報やメッセージの伝達及びその解読の過程を総称したもの(大坊, 2010)」とされている。また、人と人とのコミュニケーションとは区別して、人と馬を結びコミュニケーションを「対人コミュニケーション」とし、それは「言語的(バーバル)コミュニケーション」と「非言語的(ノンバーバル)コミュニケーション」に大別され、前者は、話し言葉と書き言葉として捉えられ、後者は、近言語(声の高さ、アクセント、間のおき方など)、身体動作(視線、ジェスチャー、表情など)に加えて、対人距離、アクセサリー等の人工物、照明や温度等の物理的環境が包含されているとしている。

一方、Canale.M.とM.Swain(1980)は、「コミュニケーション能力」の要素として「文法的能力」「談話能力」「社会言語能力」「方略的言語能力」の 4 つをあげている。また、日本コミュニケーション能力認定協会は、コミュニケーション能力を、「聴く力」「説明する力(伝える力)」「質問する力」「チームでの協調性」の 4 つの要素から捉えている(<http://www.ca-japan.org/about.html>)。さらに、企業が求人広告等で応募者に要求している「コミュニケーション能力」は、ビジネスシーンにおいて発揮が期待される「折衝能力」「交渉能力」「説得能力」であることが多いという。これらのことから、コミュニケーション能力は、共通的に誰もが身に付けておいた方がよいとされるものがある一方で、場面や立場に応じて特定の能力が求められると考えられる。したがって、スポーツ実践場面で求められるコミュニケーション能力があるはずである。例えば、サッカーやバスケットボールなどの攻防相乱型のゲーム場面では、「アイコンタクト」に代表される「ノンバーバル・コミュニケーション」が活用されるであろうし、器械運動などでは、演技終了後に時間をかけたコミュニケーションが可能である。

先述した文科省による「コミュニケーション教育推進会議」の設置も、子ども達のコミュニケーション能力の低下への危機感の表

れであるし、今回の学習指導要領の改訂において、全ての教科で言語事項の充実が図られたのも、学校教育において子ども達のコミュニケーション能力の育成が重要な課題となっていることを示唆している。

ところで、体育授業の中でコミュニケーション能力の育成を企図した授業実践報告がすでに存在する(例えば、小田ら(2004)、池田ら(2012)、等)。しかし、いずれも、コミュニケーション能力発揮の場面を量的に捉えた報告はなく、実際の体育授業において子ども達がどのような言語的、非言語的コミュニケーションを活用しているのかの実態を明らかにしている研究は見あたらない。ましてや、種目別、学習形態別で発揮されるコミュニケーション能力の具体的な姿を報告した研究はみられない。

2. 研究の目的

本研究では、まず、体育授業中に発揮されるコミュニケーション・チャンネルの実態を、他教科との比較や種目の違い、学習形態の違いに着目して捉えようとした。すなわち、体育授業中に子ども達が発現するコミュニケーションの様相を教科や種目、学習形態の面からその独自性を明らかにしようとした。

第 2 の目的は、スポーツ実践場面におけるコミュニケーションの実態を捉えることである。具体的には、チーム成員の経験値の違いやコミュニケーション能力の差に着目して、種目への理解や実技能力が、現れるコミュニケーション・チャンネルにどのような影響を与えるかを検討する。

最後に、上記結果を基に、コミュニケーション能力の育成を企図した体育授業のモデルを提案する。

本研究は、体育授業において効果的にコミュニケーション能力を育成するための授業モデルを構築するための研究である。子ども達のコミュニケーション能力の低下が指摘されている中で、体育授業でこそ育成できるコミュニケーション能力が効率的に育てられることを示すことは、全ての教科で言語能力の育成を求めた今回の指導要領の課題解決に迫るものとして意義深いと考えている。

3. 研究の方法

(1) 体育授業におけるコミュニケーション・チャンネルの実態について 教科、種目、コミュニケーション能力の違いに着目して

体育授業におけるコミュニケーション・チャンネル(以下、C・C)の実態を捉えるため、座学の授業である算数授業と比較しようとした。また、種目の違いを捉えるためマット運動の授業とバスケットボールの授業を取り上げた。さらに、これらの授業における対象者はすべて同一の 5 年生女子児童で、コミュニケーション能力が高いと評価された者と低いと評価された者を対象者とした。

対象児童の抽出

渡辺(2006)の社会的行動がとれるかどうかを 25 項目で 4 件法により自己評価させる「児童用社会的スキル尺度」の結果に、担任教師の評価を加味して、コミュニケーション能力が高いと評価される 5 年生女子児童(以下 H.S)と低いと評価される 5 年生女子児童(以

下L.S)の2名を、体育授業と算数授業の対象者として抽出した。

なお、この2名には、「体育授業に対する愛好的態度調査」(高橋,2003)の結果と「クラスへの意識調査」(高橋,2003)の結果にほとんど差のないことを確認した。すなわち、この2名は、コミュニケーション能力の発揮に影響を与えるであろうと考えられた、「体育に対する愛好的態度」と「クラスに対する意識」は同程度であると言え、C・Cの実態の違いを捉える対象者として適切であると判断された。

C・Cの把握

対象児童がどの方向を向いてもジェスチャーや表情が識別できるようにするため、マット運動の授業(3/5時間目、問題解決的学習過程)では、全体を撮る固定カメラ2台と、対象児1人を3方向から3台の移動カメラで、バスケットボールの授業(3/10時間目、問題解決的学習)では、対象児1人を4方向から4台のカメラで、算数科授業(倍数、問題解決的学習過程)は1人を3方向から3台の固定カメラで撮影を行った。その際、ジェスチャーや動きと合わせて発話の内容が確認できるように、対象児童にワイヤレスマイクを装着させ、発話をビデオカメラで拾うようにした。

マット運動、バスケットボール、算数の3授業ともクラス担任である同一の男性教諭(教職経験10年)が行い、普段の授業と変わりなく対象児童に関わってもらうように依頼した。なお、3授業とも、対象児童2名の学習活動時のグループは別であった。

C・Cの識別

発言の分類は、ベールズ(1970)の相互作用分析法による12分類を含んだ横山ら(1982)の17の分類項目を基に、28の項目で細分類することにした。

C・Cの分析は、チャンネルの種類及び授業の場面別にチェックシートを作成し集計を行った。また、ジェスチャーは、末田ら(2003)の整理に基づき機能別に、「表象記号(直接言語メッセージと置き換えることが可能なもの)」、「感情表示(身体の動きで感情を表現するもの)」、「発話調整子(うなずきやあいづち等)」、「例示子(大きさ長さ等を描写するもの)」、「適応子(話し手の身体的・心理的なニーズを満たすための動作)」の5つと「その他」の6つに分類した。なお、発言は開始から途切れるまでを1回とカウントし、ジェスチャーや表情などは、変化が認められた時を1回とカウントした。また、発言内容を、相互作用過程分析法(横山,1983)を用いて、対象児の言語を、PE(正の社会・情動に関する領域の言語)、PT(正の課題に関する領域の言語)、NT(負の課題に関する領域の言語)、NE(負の社会・情動に関する領域の言語)、NC(上記の4領域に含まれない言語)に分類した。

(2)体育授業におけるC・Cの実態について 学習形態の違いに着目して

体育授業におけるC・Cを、学習形態の違いに着目して捉えようとした。すなわち、第4学年「跳び箱運動」(全6時間)でグループ学習(以下G形態)時と班別学習(以下S形

態)時の授業で発揮されるC・Cの違いを比較しようとした。班別学習、グループ学習どちらも以下に示す一斉指導型(技紹介型)で行うこととし、授業は2クラスとも同一の男性教諭(21年経験)が行った。

対象児童の抽出

授業実施クラスを対象に、社会的行動がとれるかどうかを自己評価させる渡辺(2006)の「児童用社会的スキル尺度」を用い、コミュニケーション能力を評価した。また、体育に対する好嫌はC・Cの出現に影響を与えられたいと考えられたため、奥村(1989)の「体育科の授業に対する態度尺度」を用い、体育授業に対する評価に差のないことも抽出の条件とした。それらの結果に担任教師の評価も加味して、S形態でコミュニケーション能力が高いと評価される女子児童(以下S-H.S)と低いと評価される女子児童(以下S-L.S)、G形態でコミュニケーション能力が高いと評価される女子児童(以下G-H.S)と低いと評価される女子児童(以下G-L.S)の4名を抽出した。

授業に関わる評価

C・Cの出現状況の背景を考察する資料として、「診断的評価」と「総括的評価」を奥村の「体育科の授業に対する態度尺度」を用いて行った。「形成的授業評価」については高田による4つの評価項目「精一杯の運動」「力や技の伸び」「新しい発見」「仲良く学習」に「授業の楽しさ」を加えた5つの評価項目で行った。また、評価の際は理由を記入する欄を設け、児童の評価の中身まで捉えることができるようにした。

授業中におけるC・Cの把握

対象児童がどの方向を向いてもC・Cの記録ができるように、1名につきビデオカメラ4台で4方向から撮影した。発話は児童に装着したワイヤレスマイクを通過してビデオカメラで拾うようにした。撮影は単元2時間目と5時間目に行った。

映像観察の方法

撮影された4方向それぞれの映像を観察して、確認できた言語及び非言語のC・Cを時系列のチェックシートに記録し、集計したものを表に整理した。

(3)スポーツ実践場面におけるC・Cの実態

対象

大学生15名(男:11,女:4)の内、5年以上バスケットボールを経験した者が4名(男2:、女:2)、5年未満の者が3名(男:2,女:1)、経験のない者は8名(男:7,女:1)であった。

チーム編成

はじめに、経験の有無によるC・Cの比較を行うため、未経験者のみのチームと、経験者だけのチームを編成した。また、対戦相手とのチーム力の差の影響を明らかにするため、未経験者チーム、経験者チームの中間的な役割として、経験者・未経験者を含む混合チームを編成した。

対象学生の抽出

対象学生の抽出には、相川ら(2004)の「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」を用いた。これは、「コミュニケーション・スキル」と「対人スキル」の2つの側面から、同時にソーシャルスキルを測定できる尺度である。「関係開始」「解説」「主張性」「感情統制」「関

係維持」「記号化」の6つの下位スキル尺度から成るが、その内5つの下位スキル尺度の合計を得点とした。

ゲーム中におけるC・Cの把握

ゲーム中に発揮されるC・Cの量的把握は児童を対象にとらえようとした前述の方法と同様の方法をとることとした。

(4)スポーツ実践場面におけるC・Cの実態

コミュニケーション能力の把握

大学生20名(経験者3名,未経験者17名)を対象とし,相川(2004)らの「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」を用いて,対象者のコミュニケーション能力をとらえ,その結果の総体から高,中,低の3つの集団を構成しようとした。

技能レベルの把握

ア チームの構成方法

バスケットボールの個人的技能と集団的技能を把握するために,以下に示すスキルテストとプレゲームを実施した。

1) 個人的技能

- ・フリースロー
- ・レイアップシュート
- ・ピポットシュート
- ・ドリブル
- ・ジグザグドリブル走

2) 集団的技能

無作為に編成したチームでのプレゲーム実験協力者20名の中から5名ずつ4つのチームに分けて,2ゲーム(前・後半5分ずつ)で行わせ,その様子をバスケットボール競技歴10年以上の4名に,試合中における動きを評価させた。

上記を踏まえた技能等質でコミュニケーション能力が異なる3チームの編成

バスケットボールのスキルテストに基づく個人技能の結果に,プレゲームでの評価を加味して,技能的等質で,コミュニケーション能力が異なる3つのチームを編成した。そのうえで,バスケットボールの経験の有無とスキルテストの結果を踏まえた2名を具体的なC・Cをとらえる対象として抽出した。

総当たりの試合

ア 実施方法

で構成された3チームで総当たりの試合(前半5分間,ハーフタイム5分間,後半5分間,試合間5分間)を実施した。試合は,高群VS低群,高群VS中群,中群VS低群の順で行った。ハーフタイムには,チームごとに話し合い活動を行わせた。その際,「前半の振り返りに基づいて後半に向けた作戦を話し合ってください」という指示を与えた。

イ 総当たりの試合の記録方法

試合様相の記録は,プレイヤー全員が映るように,手持ちカメラと固定カメラの2台で体育館二階ギャラリーから録画した。ハーフタイムの際の話し合いの内容は,チーム全員が車座になっている中心にボイスレコーダーを置き音声を記録した。各チームから抽出された実験対象者2名には,どの方向を向いても表情と動作が映るように,1人につき四方向から4台の手持ちカメラで録画した。また,対象者には腕にワイヤレスマイクを付けさせ,活動中の音声をカメラで拾うようにした。

ウ 総当たりの試合の分析方法

ビデオ撮影された試合映像をもとにした以下の指標から,ゲーム様相をとらえた。

- ・攻撃完了率:全シュート数に対するシュート数の割合。
- ・仲間との関わり率:全シュート数に対するパスを用いたシュート数の割合。
- ・連携シュート率:ボールの獲得数に対するパスを用いたシュートの割合。
- ・最重要空間シュート率:全シュート数に対する最重要空間で打たれたシュートの割合。本研究では,最重要空間を3秒ルールの適応される区域とした。
- ・リバウンド獲得率:獲得リバウンド数の割合。オフェンスリバウンド,ディフェンスリバウンドに分けて分析した。
- ・パスカット率:全ボール獲得数に対するパスカットによる割合。

話し合い活動の量的・質的分析

話し合い活動時になされた会話を質的・量的に捉えようとした。

(5)コミュニケーションの実態を踏まえた体育授業モデル試案の検討

ここまでの結果を踏まえ,コミュニケーション能力を育成するための体育授業のモデルを試案した。

4. 研究成果

(1) 体育授業におけるC・Cの実態 算数授業との違いに着目して

体育授業中に発揮される子どものC・Cの実態を,コミュニケーション能力が高いと評価された児童と低いと評価された児童の2名を対象に,算数の授業との比較を通して捉えようとした。

その結果,算数授業と比べて体育授業で多く出現したチャンネルは,言語的チャンネルとして「発話数」「発話の種類」「感情を伴う発話」「NT」「NE」「ジェスチャーの総数」「表象記号」「感情表示」「例示子」「身体接触」の9種類であった。また,非言語的チャンネルとしては「ジェスチャーの総数」「表象記号」「感情表示」「例示子」「身体接触」の5種類であった。逆に,算数授業で多く出現したチャンネルは言語的,非言語的チャンネルともに「発話調整子」のみであった。

体育授業の方が多く出現したチャンネルは,感情の生起に伴って発現するものであった。今回の体育授業は達成型のマット運動であったため,「できなかったこと」が「できるようになった」喜びや,「できるようにならない」ことへの悔しさ,さらには「できないこと」を仲間に晒さなければならない状況に直面する葛藤など,多様な感情が生起する単元であった。すなわち,マット運動の授業は「できること(技術習得)」に関わって情動を揺さぶられる場面が多くあり,それが言語的・非言語的C・Cとして表出したと考えられる。「技術習得」に関わって情動を揺さぶるためには,提示する課題が簡単すぎても難しすぎてもだめである。体育授業を成功させるためにも,コミュニケーション能力を育成するためにも,学習者の「挑戦欲求」を喚起する課題を提示することや,学習者間の話し合い活動を多く取り入れるなどのモデルを構築することが求められる。

前述したように,体育授業では,言語的,非言語的のいずれにおいても,感情の生起に

伴って出現するチャンネルが多いという特徴が認められた。したがって、感情が多様に出現する体育授業では、それらの情動をうまくコントロールして適切な C・C で発信する学習の機会にもなり得ると考えられた。

今回の二つの教科間の違いに着目して C・C の実態を捉えた結果、体育授業の方がより多くのチャンネルを出現させ、なかでも感情の表出に関わるチャンネルが多く出現し、座学の授業との違いが明らかにされた。

(2) 体育授業における C・C の実態 種目の違いに着目して

体育授業中に発揮される子どもの C・C の実態を、コミュニケーション能力が高いと評価された児童と低いと評価された児童の 2 名を対象に、バスケットボールとマット運動の授業の比較から捉えようとした。

その結果、コミュニケーション能力の違いに関わらず、バスケットボールの授業で特徴的に認められた C・C は、「指示・呼ぶ」の発話が多い点、ポジティブな発話が多い点、頷きや相槌等の言語及び非言語の「発話調整子」が多い点、及び言語を伴った例示子のジェスチャーが多い点であった。

一方、コミュニケーション能力の違いに関わらず、マット運動の授業で特徴的に認められた C・C は、「意見・主張、確認・提案」が多い点、ネガティブな発話が多い点、非言語の例示子が多い点であった。

また、コミュニケーション能力の違いが異なる結果を引き起こしている点として、次に示す点が明らかにされた。

- ・ PT と PE の割合から、H.S は優れたリーダーであることが推察できるが、そのリーダー性はバスケットの授業の方がより多く発揮できる機会がある。

- ・ 感情の変化の発話は、H.S はバスケットボールで多く出現し、L.S はマットで多く出現した。これは、集団の中でよく感情が言葉で表現できる子と、個人種目で自己責任の中であれば表現できる子の存在を示している。

- ・ 上記と同様のことは言語を伴った「例示子」でも起きている。

- ・ 顔面表情の多くは「笑い」であるが、たくさん笑えるのが H.S はバスケで、L.S はマットであった。これは、上記の集団の凝集性が強い中でも感情が出せる子と、弱い中であれば出せる子がいることを示している。

さらに、以上の結果から体育授業への示唆を得ようとするれば、以下の点が考えられた。

- ・ 種目によってよく現れる C・C がある。それぞれの種目に求められるチャンネルが適切に使えるようにすることが重要である。

- ・ 勝ち負けが関わってくるボールゲームの授業では「指示、呼ぶ」といった命令口調の発話が多くなり、言語を伴った「例示子」のジェスチャーも多くなる。しかも、発話調整子が多いことからわかるように、チーム（集団）の凝集性も強くなる。そのような場合、リーダー性の強い児童のリーダーとしての振る舞い方は重要であり、コミュニケーション能力の高い児童は、リーダー性の発揮のさせ方を学ばせることが重要である。

- ・ コミュニケーション能力の低い児童にも、バスケットボールの授業で多いもの、マット

運動の授業で多いものがそれぞれあるので、それを伸ばしていく。しかし、コミュニケーション能力の高い児童の声に押されて霞んでしまうことがあるので、それを上手に拾い上げていくことと、そのようなことができるように高い児童のリーダーシップの発揮の仕方より良いものを身に付けさせる。

(3) 体育授業における C・C の実態 学習形態の違いに着目して

学習形態の違いが C・C の出現にどのような影響を与えるのかを、小学校 4 年生児童を対象に行われた跳び箱運動の授業において、コミュニケーション能力の差にも焦点を当てながら、明らかにしようとした。その結果、以下の点が明らかにされた。

- ・ 学習形態の違いによる特徴としては、グループ学習で行われた授業は班別学習で行われた授業に比べ、言語メッセージでの「話し言葉」や非言語メッセージでの「表象記号」、「感情表示」における「拍手」など、仲間と協力しながら学習を進めていくために必要な C・C の出現回数の多いことが認められた。

- ・ コミュニケーション能力の高い児童の特徴としては、学習活動を促進する働きのある意味合いの C・C の出現回数が多いということである。例えば身体接触においては成長ニーズの接触が多く、補助をしたり、されたりしながら積極的に学習内容を身に付けようとしている様子が伺えた。例示子においては他の児童に指さして活動の場を指示する等学習活動を積極的にリードする場面が見られた。また、発話調整子についても頷いたり、手を上げたりする等の C・C の出現が多く、児童相互もしくは教師との会話や発問のやりとりを円滑に行おうとする様子が見られた。

- ・ コミュニケーション能力の低い児童については、学習と直接関係のない C・C の出現が多いこと、学習内容の影響を受けやすいこと、などが特徴として認められる。学習との関係性で見ると、身体接触では体をタッチしたり掴んだりする関係ニーズ的接触が多く、適応子では体のあちこちを触ったり動かししたりする回数も種類も多い。これらの C・C は学習内容とはあまり密接に関係しているものではないが、否定的に捉えるのではなく、L.S の特徴の 1 つとして認識し、指導に生かしていくことが肝要であるといえる。

(4) スポーツ実践場面における C・C の実態

バスケットボール実践場面において成員間で行われるコミュニケーションをチーム構成員のバスケットボール経験の有無が、ゲーム実践場面における言語的及び非言語的コミュニケーション、種目に対する好嫌及び得意・不得意の認識、ボールへの接触回数等に与える影響を明らかにしようとした。その結果、以下の点が明らかにされた。

- ・ バスケットボールのゲームにおいては、言語的コミュニケーションよりも非言語的コミュニケーションが活発に行われる。

- ・ ソーシャルスキルが高い者は、ゲーム中に言語的 C・C よりも、非言語的 C・C を用いて他者とやりとりを行う。特に、パスに関わる場面で他者と意思疎通を図る、

- ・バスケットボールの経験者は、未経験者に比べて、場面に応じた適切な動作を出現させ、ゲーム中に他者とやりとりができる。
- ・バスケットボールの未経験者は、ボール操作や戦術への理解といった技能が未熟なため、場面に応じた他者とのやりとりを行うことが難しい。
- ・バスケットボールに対して「好き」であり「得意」であるという認識のある対象者は、ゲームにおいてパスに関わる回数が多い。

(5) スポーツ実践場面における C・C の実態

チーム成員のコミュニケーション能力の違いがバスケットボールのゲームに与える影響を調べるために、大学生 20 名を対象にスキルテストを行い、その結果から構成されたバスケットボールのスキル能力が等質でコミュニケーション能力に違いがある(高群、中群、低群)3 チームで総当たりの試合を実施した。その結果、話し合いを挟んだ前後のゲーム様相の変化において、高群は 6 つの指標で向上が認められたのに対して、低群が向上したものは皆無であった。すなわち、高群対低群のゲームにおいて、コミュニケーション能力の高い集団である高群の方がよりよい試合展開に持ち込めたのは、ゲーム間に有効な話し合いの行われたことが要因の 1 つとして考えられた。したがって、高群と低群の話し合い活動の様相を検討した結果、以下の点が明らかにされた。

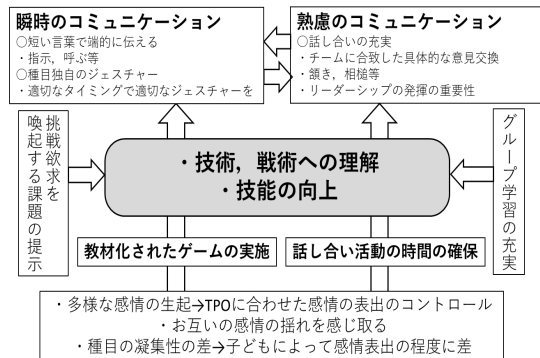
- ・コミュニケーション能力の高い集団で話し合い活動を行った場合、経験者のみならず未経験者も話し合いに積極的に参加することで、話し合いが充実し、試合中の動き方など試合での課題を解決し易くなる。
- ・コミュニケーション能力の高い集団の方が他者との関係性の築き方がスムーズであり、話し合いの際に他者の発言に対して多く反応しており、話し合い活動の充実に影響していた。
- ・発言する内容は、コミュニケーション能力の高い者が、自らの発言をより具体的に他者に伝えていた。チーム内では、試合中の動き方が分からないときに具体性のある発言をしていたために、話し合い中は互いにアドバイスし合い、結果的に動き方の改善が認められた。
- ・経験者間でもコミュニケーション能力の違いで、周りのメンバーとの関わり方に違いのあることが確認された。
- ・話し合い活動は、その発言内容に具体性が伴い、チームに即したものであることがゲームに大きな影響を与えることが示された。

(6) コミュニケーションの実態を踏まえた体育授業モデル試案の検討

ここまでで明らかにされた体育授業時及びスポーツ実践場面における C・C の実態を踏まえ、図に示すようなコミュニケーション能力の育成を企図した体育授業のモデルを試案した。

すなわち、体育授業における感情の表出にかかわる実態をベースとして、実際の体育授業においては、教育内容を明確にした「教材」化されたゲームを取り入れることと、話し合い活動の時間を確保することを通して、中核的教育内容である技術、戦術への理解を深める

とともに、技能を向上させ、体育授業独自の「瞬時のコミュニケーション」と「熟慮のコミュニケーション」の育成へと繋げていく。その際に、グループ学習の充実を図ることと、子どもの挑戦欲求を喚起する課題を提示することが重要な要因になると考えられた。また、「瞬時」「熟慮」の 2 つのコミュニケーションの特徴的な点は図中に示したとおりであるが、それらはいずれも教育内容に迫る中で指導可能なものであると考えられた。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

日高正博, 細田知里, 松本有希代, 山内正毅, 後藤幸弘, 体育授業で発揮されるコミュニケーション・チャンネルの実態 算数との比較を通して, 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター紀要, 査読無, 第 24 号, 2016, 9-20.

〔学会発表〕(計 4 件)

日高正博, 寶田光貴, チーム成員のコミュニケーション能力の違いがバスケットボールのゲームに与える影響, 九州体育・スポーツ学会第 65 回大会, 長崎国際大学(長崎県佐世保市), 2016.

日高正博, 松本有希代, 細田知里, 山内正毅, 後藤幸弘, 体育授業における児童のコミュニケーション。チャンネルの実態 種目の違いに着目して, 日本教科教育学会第 41 回大会, 広島大学(広島県東広島市), 2015.

日高正博, 体育授業における児童のコミュニケーション・チャンネルの実態 学習形態の違いに着目して, 九州体育・スポーツ学会第 64 回大会, 西九州大学(佐賀県佐賀市), 2015.

日高正博, 松本有希代, 後藤幸弘, 体育授業における児童のコミュニケーション・チャンネルの実態 コミュニケーション能力の程度の差に着目して, 日本教科教育学会第 39 回大会, 岡山大学(岡山県岡山市), 2013.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

日高 正博 (HIDAKA MASAHIRO)

宮崎大学・教育文化学部・教授

研究者番号: 8 0 4 5 2 8 5 3

(2) 研究分担者

後藤 幸弘 (GOTO YUKIHIRO)

宝塚医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号: 0 0 0 4 7 3 9 1